

壁を超えた夏

高知県立安芸高等学校二年

前田梨乃

私はこの夏、一つの大きな壁を越えた。それは目に見える壁ではない。「心の壁」、つまり、心の奥に潜んでいた「偏見」という名の見えない障壁だった。

夏休みを目前に控えたある日、友人から「夏休みの間だけ、障害者介護施設でのアルバイトをしてみない？」と誘いを受けた。正直に言えば、そのときの私はあまり深く考えておらず、私の関心は仕事内容よりも時給が高いことや、友人と一緒に働ける楽しさに向いていた。介護の仕事というのは大変そうだな、とは思ったものの、「まあ、夏休みだけだし、なんとかなるだろう」と安易に考えていた。しかし、実際に面接を受け、仕事内容の説明を聞いているうちに、不安が広がっていった。排泄介助、食事補助、車椅子の移動補助、どれもこれまでの自分にはまったく経験のないことばかりだった。ましてや、「障がいがあ

る方々と関わる」ということ自体が、これまでの私の日常には存在しなかった。「私なんか、そんな大事な仕事が務まるのだろうか」「高校生の私が、利用者さんとどう向き合えばよいのだろうか。」そう自問していると次第に心が重くなっていった。

そして迎えたアルバイト初日。真夏の強い日差しが照りつける中、私は緊張しながら施設の門をくぐった。中に入ると、車椅子に乗った方、ゆっくりと一生懸命歩く方など、年齢も性格も必要な支援の内容も様々な利用者さんがいた。

最初に任されたのは、夕食前のホールの清掃とテーブルの準備だった。私は不安と緊張から手に汗を握りながらも、一台ずつ丁寧に台を拭いていった。しかし自分のやっていることが正しいのか、迷惑になっていないか、周囲の職員や利用者さんの目が気になって仕方がなかった。

そんなときだった。テーブルを拭いている

と、「ありがとう」と、あたたかくて優しい声
が聞こえた。思わず手を止め振り返った。そ
れは私のそばに座っていた男性の利用者さん
の声だった。穏やかな笑顔とまっすぐな視線
が私に向けられていた。ただただまっすぐそ
う言われたとき、胸の奥に衝撃が走った。な
ぜならそれまで障がい者の方は「自分とは違
う世界の人」であり、私のことも、「違う世界
の人」と捉えていると勝手に思い込んでいた
からだ。だがその瞬間わたしの想像はあっさ
りと否定された。単なる感謝の言葉なのに、
今まで何度も聞いたことのある言葉なのに、
なぜか心が熱くなった。私はその時初めて気
づいたのだ。相手は「違う世界の人」ではな
くただ私と同じように親切にされれば感謝を
伝え、嬉しいことがあるれば微笑む一人の人間
なのだ。「違う」と思い込み「壁」を作って
いたのは私だけなのだ。その気づきが、私
の心に大きな変化をもたらした。今まで胸の
奥にずっとあった重たい不安や緊張が、ふっ

と軽くなるのを感じた。

その後のアルバイトでは、私は利用者さんたちと積極的に関わるようになった。ある日には、お茶配りの順番を覚えられず戸惑っている私に利用者さんが笑いながら順番を教えてくださいました。「次いつ来るの」と聞いてくれた事もあった。言葉が通じなくても、視線を交わし、手を取り合うことで、たくさんの「ありがとう」や「うれしい」が伝わってきた。もちろん、簡単なことばかりではなかった。介助がうまくいかず落ち込む日もあったし、思うように心を開いてもらえず悩んだこともあったが「誰かの役に立っている」という実感は私の心を支えてくれた。

そして、今この作文を書くために自分の気持ちを振りかえったからこそ気づけたことがある。私はバイトをするまで「障がい者介護」という言葉に対して、「特別なもの」という考えがあり無意識に「自分とは違う世界の人」と思い込み、心の「壁」を作っていたのだ。

実際には、私が「障がい者」と呼ばれる方々に対して深く理解しようとしたことも、積極的に関わろうとしたこともなかったのに。テレビやネットの中でしか見たことがなかった人たちを、私は知らず知らずのうちに「自分とは違う世界の人たち」と遠ざけていたのだ。その思い込みこそが、「壁」の正体である「偏見」だった。そしてあの時感じた心が熱くなつたあの感情も、心がふっと軽くなつたあの感覚も私の中の偏見の「壁」が崩れていく瞬間だったのだということに気づけた。障がいがある方々を「特別な存在」として見るのではなく、同じ社会に生きる一人の人として向き合うことの大切さを、私は身をもって知つた。

私は、もう以前の自分ではない。この夏の日、「ありがとう」という一言が、私を変えてくれたのだ。この経験は、私にとって何にも代えがたいお金より大事な「気づき」となつた。心の中にあつた「偏見」という名の壁を

壊してくれただあの瞬間のあの言葉を、私は一
生忘れないだろう。